資料紹介

中藤伸弥家文書「一札之事（中藤新田源蔵組名主役儀ニ付一札）」（個人蔵）

一札之事

一其御村方観音寺所持之地面中藤新田
源蔵組之儀、我等方ニ而旧来名主役相勤来候処、
道法隔諸用手遠ニ付、此度其元江名主役之儀
譲渡申、御水帳引渡候、然上者、右地面ニ付此方ゟ
故障之儀無御座候、依之地主加印之一札仍而如件

寛政十一年未三月日

中藤村
名主
藤八㊞
地主
観音寺㊞

中藤新田
名主
弥左衛門殿

江戸時代の中頃、享保年間（1716-1736）に武蔵野の新田開発が進み、現在の国分寺市域には８つの新田村が誕生しました。市内西町地区の中藤新田もそのひとつで、中藤村（現武蔵村山市）の人々が開発にあたり、村内にあった佐兵衛組・源蔵組・市郎右衛門組のうち、佐兵衛組と源蔵組が新田を切り拓いたため、中藤新田も佐兵衛組と源蔵組に分かれていました。ここでは中藤新田源蔵組の名主が交代した時の様子を伝える資料をご紹介します。

上の資料は、寛政11年（1799）に中藤村源蔵組の名主藤八と地主観音寺から、中藤新田佐兵衛組の名主弥左衛門に宛てた書面です。それまでは中藤村の名主が中藤新田源蔵組の名主を兼務していましたが、道のりが遠く、仕事に差し障りがあるため、名主役を譲り渡すことにした、と記されています。これ以降、中藤新田は現地に住む人が名主を勤める体制に変わりました。

村の代表者である江戸時代の名主は公的に認められた役職で、年貢（幕府・藩に納める税）の取りまとめや村の取り締まりなど様々な実務を担っており、役の交代は村政に関わるきわめて大切な問題でした。そのため、名主が交代する際はこのような書面を前任者と新任者の間で取り交わし、さらに幕府や藩の許可を得る必要がありました。現代とは異なり、江戸時代にはこうした公的に重要な書類も名主個人の家で作成・保管されます。本資料も、中藤新田の名主を代々勤めた家で、約200年にわたって現在まで大切に保管されてきました。　（市史編さん室　宮澤 歩美）

～市に関する歴史資料や情報を探しています～

充実した市史を作るために、国分寺に関係のある資料や記憶・情報などを探しています。資料の閲覧・撮影・調査などにご協力いただける方、昔のお話を聞かせていただける方は、市史編さん室までご連絡ください。また、これは資料かな？と思った時もご連絡ください。

お問い合わせは市史編さん室［☎042-571-7815］まで。

国分寺市史編さん News Letter　第2号　令和7年（2025）3月31日発行
編集・発行：国分寺市教育委員会市史編さん室
〒185-0034　東京都国分寺市光町1-46-8　ひかりプラザ5階　電話：042-571-7815

国分寺市史編さん

News Letter

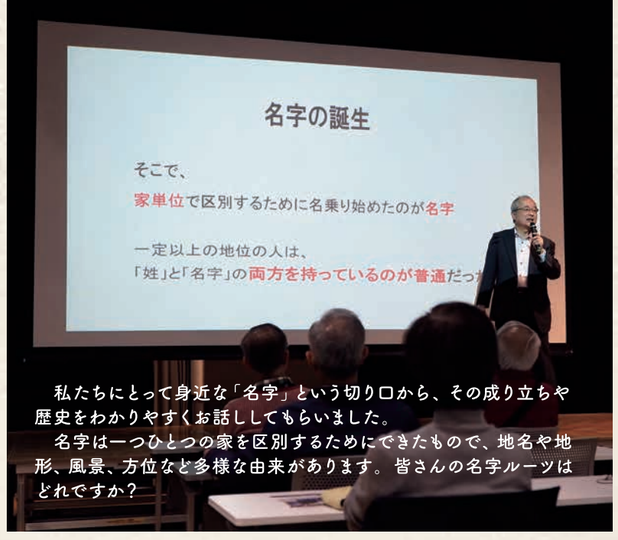
2025
3月31日
発行
Vol.02

国分寺市制施行60周年記念 市史編さん記念 歴史講演会

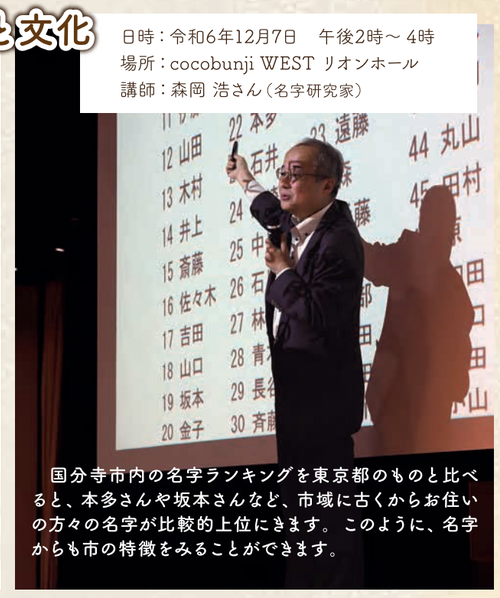
市史編さん室では、市制施行60周年と、本年度から新たな国分寺市史の編さん事業が始まったことを記念して、2つの歴史講演会を行いました。

名字のルーツに見る日本人のくらしと文化

日時：令和6年12月7日　午後2時～4時
場所：cocobunji WEST リオンホール
講師：森岡 浩さん（名字研究家）



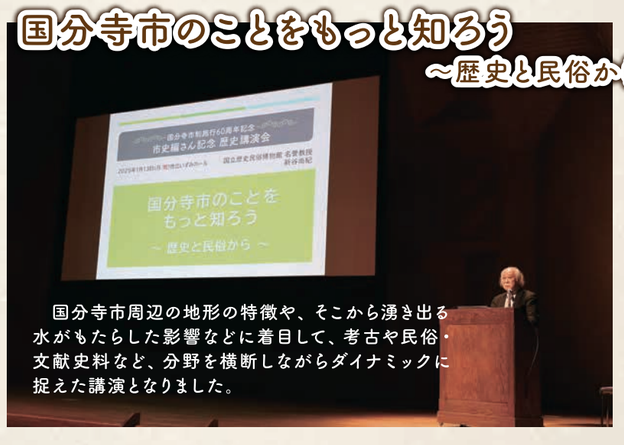
私たちにとって身近な「名字」という切り口から、その成り立ちや歴史をわかりやすくお話ししてもらいました。
名字は一つひとつの家を区別するためにできたもので、地名や地形、風景、方位など多様な由来があります。皆さんの名字ルーツはどれですか？



国分寺市内の名字ランキングを東京都のものと比べると、本多さんや坂本さんなど、市域に古くからお住いの方々の名字が比較的上位にきます。このように、名字からも市の特徴をみることができます。

国分寺市のことをもっと知ろう ～歴史と民俗から～

日時：令和7年1月13日　午後2時～4時
場所：いずみホール
講師：新谷 尚紀さん（国立歴史民俗博物館名誉教授）



国分寺市周辺の地形の特徴や、そこから湧き出る水がもたらした影響などに着目して、考古や民俗・文献史料など、分野を横断しながらダイナミックに捉えた講演となりました。

NHK「チコちゃんに叱られる！」でもおなじみの軽妙な語り口で、笑いのある講演会でした。

講演会の記録は、令和8年度刊行の「市史研究」にも掲載の予定です。
当日の講演をふり返りたい方、当日ご参加いただけなかった方も、ぜひご覧ください！

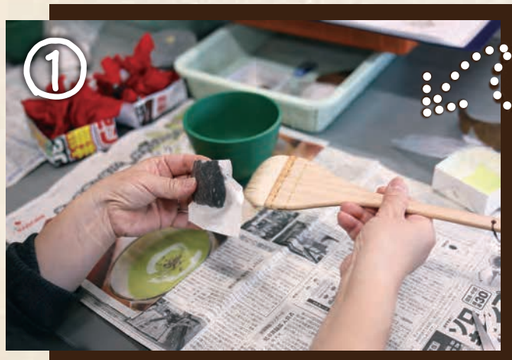
市民協力員 活動報告

新たな国分寺市史編さん事業では、市民と協働で作り上げる市史を目指し、令和6年4月から5月にかけて市民協力員を公募しました。14人から応募があり、6月に原始・古代・中世部会に4人、近世・近現代部会に7人、現代市制部会に3人加わっていただき、それぞれの部会ごとにさまざまな作業を通して、編さん事業にご協力いただいています。

原始・古代・中世部会

原始・古代・中世部会では、縄文土器の拓本をとる作業や板碑の接合、報告書を読んで資料リストを作成するなど、市民協力員が多くの作業を担いました。市民協力員の中には、大学で考古学を学んだ方もいる一方で、未経験の方もおり、協力員同士で教え合い、執筆に携わる専門員や調査員の指導を受けながら、少しずつ知識・技術を身につけています。

ここでは、令和6年度に行った作業のうち土器の拓本について、市民協力員の作業の様子をご紹介します。拓本とは、土器や瓦、石造物などの形や文様、文字を紙に写し取る方法の一つです。



土器の破片より一回り大きく切った画仙紙を土器に合わせ、刷毛や脱脂綿に水をとって土器と紙が密着するように紙を濡らします。

画仙紙を少し乾かし、綿を詰めたタンポに墨をとってポンポンと紙に墨をのせていきます。

乾ききる前に土器の破片から紙をはがしよくのばしたら完成！

このような方法を間接湿拓法といい、土器を汚すことなく拓本を採ることができます。縄文土器はひも状にした粘土を一段ずつ積み重ねて作るため、ひもとひもの境目を指やヘラでナデたり、形を整えるために削ったり磨いたりと、製作方法はさまざまです。完成した拓本をもとの土器の写真と見比べると、写真ではわかりづらい土器表面の文様やナデ・ミガキなどの調整の痕跡もよく観察することができます。拓本は土器一つずつの特徴や製作過程などを知る手がかりとなるのです。

新しい市史では多くの土器の拓本やカラー写真、3D画像を用いて分析を行う予定です。今後も市民協力員とともにさまざまな史資料の整理、調査を行い、新しい市史を編さんしていきます。（市史編さん室　木村 遊）

近世・近現代部会

令和6年11月2日～4日の3日間、泉町の新庁舎で開催した市制施行60周年記念式典・新庁舎落成記念式典にあわせ、新庁舎エントランスホールにおいてパネル展示「資料でたどる国分寺のあゆみ～村から町へ、そして市制の誕生」を開催しました。

本展は、江戸時代から市制施行に至るまでの市の歴史を紹介するもので、パネルの解説文は、近世・近現代部会の西木浩一部会長監修のもと協力員７人が執筆し、当日は展示解説も行いました。ここでは、パネル作成・展示解説を行った市民協力員の方の声をご紹介します。

市民協力員　山室 智子さん

私たち協力員は東京都公文書館での資料撮影、パネルのキャプション作成、当日の解説員として参加しました。私の担当は「幻の三町合併計画」で、昭和29年（1954）に国分寺町、小金井町、小平町の合併計画があったが、住民の反対で実現しなかったというもの。

パネルの前で足を止め、じっくりと読んでくださる方も大勢おられ、また、国分寺市誕生当時のことを教えてくださる方もいて、和気あいあいとした雰囲気で、とても有意義な体験でした。

市民協力員　佐藤 江美子さん

私は江戸時代の村々を担当し、解説文作成のための資料からは約200～300年前の国分寺市がどのような場所だったかがわかりました。江戸時代中頃まで市域の多くの土地は人の住まない原野だったこと、炭焼きが行われていたこと、武蔵国分寺跡が畑地となり雑穀などが栽培されていたことなど、今の国分寺市からは想像もできませんでした。

また市役所での展示解説では歴史を通して多くの方と交流でき、楽しい時間を過ごしました。

より多くの市民の皆さまに展示を御覧いただけるよう、展示の内容をまとめた冊子を発行予定です。また、市民協力員だけでなく、市民の皆さまに参加していただきながら市史編さんを進めてまいります。今後の活動にご期待ください。

（市史編さん室　宮澤 歩美）